

日本中世英語英文学会東支部 第32回 研究発表会 プログラム

- 開催日 2016年(平成28年)6月18日(土)
- 会場 駒澤大学 深沢キャンパス 深沢校舎
〒158-0081 東京都世田谷区深沢 6-8-18
開催校連絡先 TEL 03-3418-9207 (唐澤一友研究室)

- 受付 [12:30-15:30] 1階
- 開会式および東支部総会 [13:30-14:00] 2階講義室 2-1 (司会) 東京未来大学 宅間 雅哉
[開会式] 日本中世英語英文学会会長挨拶 慶應義塾大学 松田 隆美
開催校挨拶 駒澤大学学長 廣瀬 良弘
日本中世英語英文学会事務局長挨拶 慶應義塾大学 徳永 聡子
[東支部総会] 事務局報告他 仙台大学 鎌田 幸雄
会計報告 駒澤大学 福田 一貴
会計監査報告 千葉商科大学非常勤講師 貝塚 泰幸
開催校案内 駒澤大学 福田 一貴
- 研究発表 [14:10-16:30] 2階講義室 2-1
1. [14:10-14:50] (司会) 関東学院大学 多ヶ谷 有子
John Lydgate の *Life of Our Lady* における身体の表象と積義学的問題
..... 慶應義塾大学大学院 新居 達也
2. [15:00-15:40] (司会) 慶應義塾大学 不破 有理
Fantastical Crusade Historiography: Narrative Choices in the Middle English *Richard Coeur de Lyon*
..... 千葉商科大学非常勤講師 Matthew James Stanham
3. [15:50-16:30] (司会) 東京大学 寺澤 盾
後期古英語と初期中英語の使役・勧誘表現の分布
..... 千葉大学非常勤講師 海田 皓介
(休憩 [16:30-16:50])
- 講演 [16:50-17:50] 2階講義室 2-1 (司会) 信州大学 伊藤 壺
ブリテン、北欧、ユーラシア：クヌート海上王国成立の背景
..... 立教大学 小澤 実
- 閉会の辞 [17:50-18:00] 2階講義室 2-1 駒澤大学 唐澤 一友
- 懇親会 [18:10-19:40] 会場：洋館 1階大ホール

■ 注意事項

1. 会場への交通および建物の配置については、同封の案内図をご覧ください。
2. 受付は、深沢校舎 1階です。
3. 支部会費(一般 2,000円、非常勤講師、退職者、学生・大学院生 1,000円)の納入につきましては、受付でご確認ください。会費未納の方は、受付で申し受けます。当日のみ参加の方は、当日会員会費として 500円を申し受けます。
4. 会員、発表者、司会者の控室は、深沢校舎 2階講義室 2-2 です。
5. 大学の教室運営の関係上、会場および控室の開場は 12時30分頃の予定です。何とぞご理解のほどお願いいたします。
6. 深沢キャンパスに食堂はありません。会場も飲食禁止となっておりますので、昼食を済ませてご来場ください。
7. 喫煙は館内の所定の場所をお願いいたします。
8. 懇親会費(学生・大学院生 3,000円、それ以外の方は 5,000円)は、当日受付でお納めください。
9. 乗用車での来場はご遠慮ください。

日本中世英語英文学会東支部 [事務局]

〒989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18 仙台大学 鎌田幸雄研究室内
Tel: 0224-55-1121 (代)、0224-55-3062 (直通)

<研究発表・講演要旨>

研究発表1 John Lydgate の *Life of Our Lady* における身体の表象と積義学的問題

新居 達也 (慶應義塾大学大学院)

司会 多ヶ谷 有子 (関東学院大学)

本発表は、John Lydgate による聖母マリアの生涯を題材とした長編詩 *Life of Our Lady* (c. 1410s-20s) に描かれる聖母子の身体性が記号表現と指示対象の対によって成り立つ「テキスト」の表象として解釈できることを、15世紀前半の聖書積義学上の論争との関連において示す。

中世後期の聖母崇敬においては、キリストの受肉が聖母マリアの処女懐胎によって成されたという考えから、マリアは現世の信徒とキリストを結ぶ「とりなし」(intercession) の役割を果たすものとして捉えられた。*Life of Our Lady* では、このような信仰を反映して、キリストを胎内に宿したマリアの身体が信徒に神の意志を伝えるための媒介として表現されている。この媒介関係においてマリアの身体は聖堂や衣装等のキリストを包むものへと喩えられるが、こうした比喩は積義学的なテキスト観を表現しているとも解釈可能である。例えば、降誕に際してマリアはザクロの表皮、キリストはその果実として描写される。Alan of Lille らの言説の中で *integumentum* の概念に言及する際に頻繁に同様の比喩が用いられていた事実を考慮するならば、この聖母子の関係の描写はマリアを記号表現、キリストを指示対象としてそれぞれ置き換え、表象したものであると考えることができる。

これを裏付ける背景として、14世紀後半から15世紀前半にかけてのウィクリフ派の台頭に伴って生じた聖書積義学上の論争との関係を挙げることができる。異端論争によって喚起されたテキスト解釈上の問題への関心が *Life of Our Lady* の中に見受けられるのである。具体的には、本作品におけるマリアの身体は *integumentum* と関連してその表面上の性質によってではなく内在するキリストの栄光により解釈されることを求められる。これはテキストの表面的な意味に留まり内実としての真理に至らない聖書解釈を批判する同時代の言説と呼応するものである。さらに、聖書積義学における正統神学と異端の最大の相違はテキストの解釈者としての教会組織の権威を認めるか否かという点に求められるが、Lydgate は正統派に属しながら *Life of Our Lady* では権威的な解釈者の介在について極めて曖昧な態度を示している。これらの徴証をもとに、本作品が聖書解釈を巡る異端論争の複雑さを反映している可能性を考察したい。

研究発表2 Fantastical Crusade Historiography: Narrative Choices in the Middle English *Richard Coeur de Lyon*

Matthew James Stanham (千葉商科大学非常勤講師)

司会 不破 有理 (慶應義塾大学)

Richard Coeur de Lyon is one of only three surviving Middle English narratives to directly address the crusades as historical events. Of the two other extant texts, *Godeffroy of Boloyn*e is a fairly straightforward translation of its French source, and *Capystranus* has no apparent surviving precursor. Consequently, *Richard Coeur de Lyon* is rather unique, in that its direct historical sources in Latin and Anglo-French are easily identifiable (the *Itinerarium Peregrinorum et gesta regis Ricardi* and the *Estoire de Guerre Sainte*) and yet it follows neither very closely at all. Moreover, its heroicising of Richard and wholesale rejection of foreigners, both Christian and non-Christian, suggests the construction of a highly insular identity that contrasts interestingly with a number of other Middle English texts, particularly those belonging to the Charlemagne cycle. In the form that it has come down to us, however, it owes as much to fantasy as it does to history. This paper seeks to disentangle some of these elements, contextualise them, and discuss the significance of what was included, what was excluded, and what was invented.

Although the earliest extant text is incomplete, forcing editors to rely on later versions to compile a complete narrative, the poem can still be profitably examined as a whole. Its apparent continued popularity over time suggests a need for a shifting understanding of its significance. Examining the narrative strategies employed with reference to the changing political situation in medieval England allows us to think critically about the purpose of *Richard Coeur de Lyon* and its potential reception by various imagined English audiences. Of particular interest is the interplay of fantasy and reality within the poem, and its reflection in crusade chronicles, medieval epics, and Middle English romances. Not only how the fantastical elements manifest in the narrative, but also to what extent they reflect the ambitions and fantasies of those politically, militarily, and religiously empowered in medieval English society. Such texts have recently been described as “recovery romances”, imaginary and surrogate reconquests of lost Christian lands and holy places, which is an intriguing notion.

The intersection of fantasy and reality in crusade historiography has the potential to cast light on the intent of medieval writers, the expectations of their patrons, their beliefs and their hopes. Where it is evident that a fantasy narrative has been deliberately chosen that light is particularly bright.

研究発表3 後期古英語と初期中英語の使役・勧誘表現の分布

海田 皓介 (千葉大学非常勤講師)

司会 寺澤 盾 (東京大学)

本研究は古英語・中英語の過渡期における使役表現(「～に～させる」)と勧誘表現(「～しよう」)について、複数の語彙交代を体系的に扱う。使役・勧誘両表現ともにモダリティの表現要素であるという仮説に基づき、両表現にどのような迂言形式が用いられ、説教集や聖人伝といった異なるジャンルにおいてそれぞれがどのような分布を見せるかといった点を主に考察する。

現代英語において使役表現は *let* + 不定詞により、勧誘表現は *Let's* + 不定詞により表される。つまり、現代英語 *let* は使役表現と勧誘表現の両方に用いられる語彙であることがわかる。本研究は、どのような経緯で *let* がこうした分化をしているのかという疑問に端を発している。

理論的側面として、使役・勧誘両表現ともにモダリティとの関連を伺うことができる。使役表現には *let* の他に *make* も用いられるが、*let* は「～に～することを許可する」、*make* は「～に～することを強制する、義務として課す」とパラフレーズできる。本研究はこのことから、使役表現をそれぞれ (i) 許可表現・(ii) 義務表現と二分する。一方 (iii) 勧誘表現は、話者が聞き手に一緒に命題を実現することを呼びかけるという機能から、話者の「意志」の表現と見なすことができる。こうした「許可」「義務」「意志」といった概念はモダリティの研究対象であり、Palmer (2003) などの先行研究により主に法助動詞を対象として多数議論されてきている。しかし、こうした理論的考察を使役・勧誘両表現というコンテキストにおいて議論したものは比較的少ない。このことから、両表現とモダリティの関連が歴史的にどのように見られるかという点は本研究にとって重要である。

英語の歴史上、使役・勧誘両表現には *let* の他にも様々な語彙(いずれも不定詞を伴う)が競合・交代をなしていることが古英語・中英語の文法書などの記述から読み取れる。OED2 による記述を概観すると、古英語の (i) 許可表現は主に *lātan* (中英語 *lēten*, 現代英語 *let*) によって表されていた。(ii) 義務表現としては *hātan* ‘to command’ (中英語 *hōten*, 現代英語では廃用) が中心であったが、中英語から *māken* (古英語 *mācian*, 現代英語 *make*) により置き換えられる。(iii) 勧誘表現は古英語 *uton* (中英語 *ute*) (本動詞 *gewītan* ‘to go’ の接続法形に由来し、初期中英語にて廃用となる) によって表されるが、中英語から *lēten* による形式が台頭し、これが主要素となっていく。従って使役・勧誘表現の多彩な迂言形式の交代には、後期古英語から初期中英語への過渡期が要となる。

この時代はまた、Ælfric's *Catholic Homilies*, Ælfric's *Lives of Saints*, *Lambeth Homilies*, *Lazamon's Brut* 等の重要文献が生まれた時期でもある。こうした語彙的、文献学的背景を踏まえ、それまでの先行研究において焦点を当てられることの少なかった使役表現と勧誘表現の研究手法を提示したい。

講演 ブリテン、北欧、ユーラシア：クヌート海上王国成立の背景

小澤 実 (立教大学)

司会 伊藤 盡 (信州大学)

本年 2016 年は、デンマーク出身のヴァイキングであるクヌートが、イングランド王となって 1000 年を記念する年である。淵源を辿れば、10 世紀半ば頃歴史に登場したデンマーク・イェリング王権は、国内の大規模建設作業と周辺諸権力との婚姻政策を通じて国内並びに周辺地域との関係を安定化させたのち、スヴェン王の治世に大規模なイングランド襲撃を数度にわたりおこない、1013 年にはイングランド支配権を現地有力者に認めさせるに至った。翌年のスヴェンの急死によりウェセックス王家の巻き返しはあったものの、その息子クヌートが再度イングランド王位を手中にし、デー人王朝が成立した。その後クヌートは、兄ハーラルの死を受けて 1018 年にデンマーク王位を獲得し、1028 年にはノルウェー王位をも獲得した。クヌートは、北海をとりかこむ三国を直接支配するだけでなく、それらに隣接するスコットランド、ウェールズ、アイルランド、スウェーデン、西スラヴなどにも触手を伸ばし、神聖ローマ帝国とローマ教皇庁との連絡回路も確立した。このヴァイキング王は、ゆるやかな帝國的構造を持つ海上王国を、11 世紀前半の北ヨーロッパ世界に現出せしめたのである。

かようなクヌート支配に対する関心は、同じくイングランドを征服した外来者ウィリアム 1 世と比較するとわずかな資料しか伝来していないとはいえ、絶えず払われ続けてきた。クヌート支配それ自体に特化した文献に絞ってみたとしても、Laurence Larson の伝記 (1912) を嚆矢として、M. K. Lawson によるイングランド支配を掘り下げた研究 (1993)、Alexander Rumble 編の学際的論集 (1994) そして Timothy Bolton による帝國的構造の研究 (2009) を手にすることができる。そして本年 6 月 27 日から 7 月 2 日にかけてイギリスのノッティンガム大学では、クヌートの歴史的事業をその特集テーマの一つとした大型シンポジウム「Viking World: Diversity and Change」が開催予定である。近年の研究動向を見る限り、クヌート支配をめぐる歴史学的研究は、クヌート自身の伝記的アプローチではなく、その海上王国が持つ帝國的構造に対する関心へと移行している。

本報告は、こうしたクヌート海洋王国にそなわる帝國的構造が成立し機能する条件を、紀元 1000 年前後におけるブリテン、北欧、そしてユーラシア西部をつなぐネットワークの展開のなかに位置付ける試みである。越境的現象をその俎上に載せるグローバルヒストリーという言葉が喧しく響く近年の研究状況のさなか、中世における越境的存在の代表格であるヴァイキングが果たした歴史的役割の一端をスケッチしてみたい。

駒澤大学深沢キャンパス・マップ

■洋館■

【1階大ホール】

懇親会会場

【1階小ホール】

全国大会準備委員会会議室



■深沢校舎■

【1階】

受付

【2階講義室 2-1】

開会式・東支部総会・
研究発表・講演・
閉会の辞

【2階講義室 2-2, 2-3】

会員控室・
東支部幹事会控室

交通アクセスマップ

■電車の場合：東急田園都市線「駒沢大学」駅下車。「駒沢公園口」出口から徒歩約15分





■バスの場合：東急バス

駅	乗り場	系統	行き先	下車停留所	停留所より
渋谷	45番	渋82	等々力行き	駒大深沢キャンパス前	徒歩1分
三軒茶屋	5番	渋82	等々力行き	駒大深沢キャンパス前	徒歩1分
等々力	1番	渋82	渋谷駅行き	駒大深沢キャンパス前	徒歩1分
		等11	祖師ヶ谷大蔵駅行き	駒大深沢キャンパス前	徒歩1分
自由が丘	1番	自01	駒大深沢キャンパス前行き	駒大深沢キャンパス前	徒歩1分
		自02			
千歳船橋	B	等11	等々力操車所行き	駒大深沢キャンパス前	徒歩1分